

● あの日あの時 第12回

逝った画友・福井正治のことなど

伏木田 光 夫



一人の人間が魂の奥深いところまで入れてしまう友人というのは、せいぜい二、三人くらいのもので、それが五人もいる人はよほど神の恩寵めでたき人だろう。

画友・福井正治と出逢ったのは僕が浦河高校の学生だった頃で、福井は東京芸大を中途退学して、穂別中学の代用教員をしていた。確か1951年の夏であったが僕はスケッチブックを背負って、下駄をはいて北大農学部の教室に辿りついた。夏休みの北大はひんやりとした樹下の中であって、その扉をあけると国画会の札幌デッサン講習会が企画されていたのだった。高校生だった僕には国松登と橋本三郎しか講師の名前は知らなかった。生れて初めて裸婦デッサンを描くというので大いに張り切っていたのだろう、下駄をぬいで素足で嚙りつくようにモデルを描いた。

そこに福井正治がいたのである。福井はその時すでに酔っていて繊細でいながら大胆な線を声を出して引いていた。

講師は只一人、太い腕で煙草を^{おか}陸蒸気のように吐き出して、裸婦に喰らいついて、人の作品など一度も見ない原精一という東京の国画会の会員だった。講師に名をつらねていた国松登と橋本三郎は結局最終日だけやって来たので、三日間は原精一の一人講師だった。この講習会はしかし凄味のあるデッサン会であった。不可解なものを原精一は参加者につきつけたのである。しかしこの出逢いが、まさか僕の一生を決定づける出逢いとなるとは、その時思ってもみなかった。

僕は終生の師、原精一をこの時、得ることになり、福井正治という、とび切りの画友を魂の奥深いところまで

入れることになった。

それからである。一目散に僕は画家になった。その頃はまだ米穀通帳がないと米は買えない時代で武蔵野美術学校二年生の時、高校時代から描いていた「現代の神話」という作品を第十回・全道展に出品して奨励賞を頂いた。戦後十年を迎えた全道展は、キラ星の如き新鋭が轡^{くつわ}を並べていて、国際的な美学が全道展のなかにも渦巻^{うずま}いていて、純粹抽象に対して新しい具象絵画、そして次のアンフォルメール運動まで熱気に満ちていた時代だった。僕は第七回展が初入選の時、高校生の僕はエレベータから下りて来た、白髪瘦身の上野山清貢と出逢った。この世の人とは思われない高貴さがある、こういう人を画仙というのかと思った。全道展の創立会員の最晩年の姿であった。次に下りて来たのが花のように美しい松本伸子（八木）と八木保次のさっそうとした姿にしばし息をのんだ。会場に入ると白いルパシカを着た蛭子善悦が、近づきたいほどの美女の鎌田俳捺子とフランスのモンパルナスもかくありなんの風情で話している。田舎から出て来たニキビ面の僕は溜息をついたものであった。さてざっと書いても、柄内忠男、本田明二、砂田友治、谷口一芳、竹内豊、岸葉子、藤本俊子、小野州一、野本醇、菅野充造、竹岡羊子、鶴川五郎、木村訓丈、渡邊眞利、岸本裕躬、神田一明、神田日勝、神田比呂子、箱根寿保とずらりと並び、いづれも一匹狼で、それでいて少し離れて眺めると曠野を群れになって駆けていく一群であった。

後でふり返ると、戦争という重い時代のあとに来る熱い時代であった。

会員になって審査に加わるようになると、前列中央、国松登と小川原脩、橋本三郎のぶつかり合いは、すさまじいもので審査とはこういうものかと教わったものである。小川原脩は特に論理派で「個が集団を突き動かす」という全道展の基本的姿勢を形づくった作家である。ある酒宴の場で死んだ渡辺伊八郎（戦場では上等兵）が戦争中、戦争画を描いた小川原脩に鋭く迫った時があった。その時の小川原の苦痛にみちた表情を忘れない。ポーランド映画「灰とダイヤモンド」の重さのように、わが先輩、小川原は国家のためにある作家でなく、作家が集団を突き動かすという、民主主義の基本を、重さを背負いながら辿りついた作家であった。

全道展が徹底して、ボスを作らない集団に至ったのは先輩達の戦争後の不動の視点にあると思っている。

福井正治とは、いつも全道展で一緒だった。酔どれ天使であった福井は酔っぱらっては落下した。そしてそこに天使を見た作家だった。純粹過ぎて哀しみと歓びが福井には痛いように見えた。二十代の頃、僕と福井と大久保一良で「北緯」というグループを作った。あとで戦後の北海道の美術史のなかに組み入れられるとは思わなかった。小さいグループであった。そして1985年から十年間続いた「グループ朔」が結成された。木村訓丈、岸本裕躬、野本醇、神田一明、福井正治、そして僕の六人であった。いずれも全道展の仲間であって、木村訓丈が「朔」という名前をつけた。六人の侍は途中一人の仲間を、あの世に送った。福井正治だった。1989年10月6日、わが魂の友はバックスのいる世界に一人、リックサックに、えのぐと筆とパレットを背負って逝ってしまった。「ミッチャン、大丈夫だよ」と云って逝ってしまった。

僕は全道展に生きている限り、ずうっといるつもりである。老いて、もう腰が曲って、もうやめてくれと云われてもいるつもりである。福井正治が全道展を愛した分、僕はいてやらなければいけない。それが友情というものだ。僕にとって全道展は仲間のいる砦だった。蛭子善悦や小野州一や岸本裕躬や箱根寿保や木村訓丈や柄内忠男や本田明二や砂田友治はあの世にいったが、まだ仲間がいる。仲間が全道展を愛した分、最後まで絵を描きつけて、僕の人生はザ・エンドとしよう。



第66回 全道展審査を終えて



6月9日～10日の2日間を通して行なわれた、今年的全道展審査。昨年より40点少ない242点の入選作は、それだけ厳しい審査の目で選ばれたと言える。

4部門の審査委員長に感想を寄せてもらった。

総合審査委員長
絵画部門審査委員長

川本 ヤスヒロ

総評

札幌の街が1年中で一番華やぐ6月に全道展が開催される。ライラック祭り、神宮例祭、YOSAKOIソーラン祭りなど札幌の街、大通公園を中心に諸行事が行われる。リラ冷えの日や夏日の日もあるが外気に触れて北海道の初夏、札幌の良さを味わうのにすばらしい6月である。

私は45年前、16歳の時に全道展に出品した。私の住んでいた釧路から50号3点に炭鉱の建物を描き出品したが、みごと落選となった。その年の6月4日(日)、当時、丸井今井テパートで開催されていた会場に見学に行くことにした。全道展のそれぞれの作品の魅力に圧倒され、入選することのなかった自分の作品の未熟さを思い知った。私は1点1点じっくりと鑑賞することにした。すると、今は亡き会員の熊谷善正氏の絵の前で先生から来年出品するにあたり、色々ご指導を受けることができた。私は親切に絵の話をしていただいた先生の言葉を大切に、1年間制作に励み、翌年23回展で入選することができた。私の人生を左右した、あの1日は札幌の偉大さ、全道展の有難さを味わったことであった。

今年的全道展は6月15日(木)から札幌市民ギャラリーで始まった。早速、私は初日に会場へ行ってみた。全道展は今でも45年前に私が初めて見た時の精神が残っており、会員・会友の作品にも入選・入賞した作品にも魅力のあるものがたくさんあった。全道展の作家は作品に対する想いが強く、真剣に絵画の制作に取り組んでいる。入選・入賞作品・会友作品は9日(木)・10日(金)の2日間、審査で行われた。1点1点慎重に審査をし、やはり入選しなかった作品は今一步、作品としての魅力が足りなかったと思う。これから全道展に出品するのであれば、会期中に1回でも全道展の作品を鑑賞してほしいと思う。

さて、今年絵画部門の入選・入賞作品は198点で昨年よりも35点少ない。22回全道展の入選・入賞作品は105点であるので、今から比べるとさらに以前は厳選で



あった。入選した作品は魅力があり、熱気が溢れ、個々の作品からも独自の雰囲気が醸し出されている。特に、会員に推挙された新井田順一・隅田重明・成澤正子・木滑邦夫の4人は作品の質の向上はもちろん、各個人固有のモチーフで追求され、表現している。全道展は個々がそれぞれ自分の個性を大切にして、精一杯キャンバスに向かって挑戦し、具現化している。だから、全道展全体の絵画の質や魅力が向上するのではないかと思う。私自身、全道展の会員の一人として改めて作品追求に励まなければならないし、私にとって、全道展は諸先輩や画友の作品を見て勉強させてもらっている。そういう意味では、全道展はとても大切な場であり、もっともっとたくさんの魅力ある作品が出品されることで、若い世代の人たちから年輩の方まで多くの方が出品したくなるような全道展、会自体がもっと充実した作品が(破綻したものもあってよいのであるが)、会場に来てくれた大勢の鑑賞者に大いなる感動と刺激を与える重要な場にこれからもなってもらいたいと思う。

版画部門審査委員長

大井戸 百合子

全体の2/3は木版、残りは銅版とその他の版種、木版は数が多いだけ、すぐれた作品が多く見ごたえがある。その他の版にも秀作はあるが今後幅広く普及したいと感じた。吉田千世子さんはもうすこし冒険してほしい。長澤さん、中心になる所が見えない。松浦進さん、個性があるのでこのままやってほしい。三浦さんは、色彩が個性的で新しい海を感じる。五十嵐さんは落ちついた色がいい。構図を少し考えてほしい。高崎さんはまとまりのある良い作品だと思います。佐藤麗子さん、枝をもっと多くしてほしい。田中さん、この調子でやってほしい。佐藤静夫さん、スポーツの面白さがあるのでもっと動いてほしい。青木さん、コスモスの花に複雑な表現力がほしい。金山さんの作品は印象が堅い。山や草に工夫がほしい。川口さん、落ちつきのある魅力的作品なのでさらに追求して下さい。菊地直子さん、ユニークな視点にひかれた。中心になるものを強調する。佐野さんは緑の色に変化がほしい。今野さん、もう少し人の顔を見たい。藤林さん、北海道の雪をよく感じる。建物の構図に一步工夫する。根本さんむずかしい子供をよく表現している。このままやってほしい。坂東さん、色が美しい。彫っているものが見えないので工夫して下さい。吉田志

麻さん、白黒で美しい作品になっている。上の方の花が多すぎる。山本さん、北の山々をみごとに表現している。吉田守さん、やわらかい色調が美しい。船が効果的に表現されている。野村さん、みごとに花を表現している。蕾もあっていい。森田さん、ユーモアがあって面白い、さらにつづけてほしい。菊崎さんは裏道に憂いがあり良い作品である。小林さん、明るい色彩をさらに追求してほしい。坂さん、中途半端で切った構図に現代の不安がある。佐藤拓実さん、見る人の目にやきつくものがある。田中さん、セピア色が美しくのびやかな銅版になっている。松浦優香さん、みずみずしいセンスを感じる。菊池さん、落ちつきのある魅力のある作品である。新会友・石塚さん、北海道のさびしい情景が画面全体からあふれてくる。同じく新会友・高野さん、赤をアクセントに緑と黒が落ちつきをあたえている。さらに自由になってほしい。

佳作賞の浅川さん、蜂というテーマが面白い作品になっている。奨励賞・佐藤誠さん、現代人の心の底にあるテーマを表現した良い作品である。同じく奨励賞中嶋さん、ぶどうのつと葉・複雑な彫り、色彩をもう一步変化をつけると広がりが出る。

奨励賞・今野さん、北海道の冬の森の静けさをよく伝えている。見る者を引きこむ力がある。

佳作賞・谷さん、雪の白の残し方、木版の彫りの効果をあますことなく見せてくれる。

その他受賞者、新会員の作品はいずれも、キャリアのある見ごたえのある作品になっている。

彫刻部門審査委員長

伊藤 寿朗

毎年審査の度に思い起こす事は、一般出品の時の事である。搬入の時から緊張し、出品手続きが終了してもなかなか立ち去れず、次々と搬入されて来る作品を驚きや羨望そして気後れを感じながら眺めていました。会友の時は、自分が注目している会友の作品が楽しみでドキドキしていたものです。審査するようになると一人一人の作家の成長が楽しみになりました。東京の会員もいて全員揃っての審査とはいかないのは残念ですが、会員も増えて白熱した審査になりました。東京の中央展にも引けを取らない充実した作品が揃ったと思います。入選した方々は是非とも地方で満足しないで中央にも発表し、発信してください。公募展が力と力のぶつかり合いの意味からすると会友の作品が充実する公募展が一番活気のある



る公募展と言えるでしょう。今回の会友の作品群は、作家としての確かな技量と構成力を備えた秀作が多かった。何よりも自分の進むべき視点をしっかりと確立し、外連味無く表現に立ち向かっているところが素晴らしい。受賞作家も、新会友も一般で見事入選された皆さんも、創作意欲をさらに高めて、自由奔放で自分らしい個性的な作品を期待します。具象にしても、抽象にしても、初めはまとまりのない人体も、表現したい感情や作家の感性がそのままに置く事を決して許さない。石の塊も刻みつける作家の意図を刺激して止まないし許さない。木も粘土も形作られる事を待っている。創造の世界に益々のめり込んで、彫刻の魅力を体感し、労作を持ち込んで欲しい。期待しています。

工芸部門審査委員長

高橋 政幸

今回の一般応募作品は、応募数は若干減少したものの、例年並の水準は維持されて居りました。工芸分野は幅が広く、陶芸・木工・ガラス・金属・染織等多く分野から出品されて来ますので審査も活発に意見を出し合っており、如何にして公平で質の良い作品を選ぶかに苦慮しております。中には手芸のような全道展には馴染まない作品も出品されて来ますので、今後受付の時点で何等かの対策が必要になると思います。近年ガラスの作品が徐々に増加の傾向にあり、個性的で感性の光る作品が見られるようになりました。陶芸の応募作の中には「ヒビ」「キズ」等があるものもありましたので、出品の際には充分注意して頂きたいと思って居ります。入選作は全体にまとまって居り、着実に充実して来て居ります。金属の作品は時々出て来ますが、実用性と創造的要素との兼ね合いが今後の課題と言えます。染織の出品は毎年何点か見られますが、安定した水準には致って居ないようです。全体を見渡して作品が大形化しつつあるように感じられるのですが、広い空間に展示しますので、どうしても大きなものに目が向く傾向は否定出来ませんが、大小にかかわらず感性を磨き集中力を高めて、内面から湧き出るアイデアに沿って創作することによって納得の行くものが出来ると思います。

惜しくも入選又は入賞出来なかった皆さんも、次回には良い結果を出せるよう努力されることを願って居ります。

私達会員も多くの皆さんに会友又は会員として共に工芸の発展と、一段と充実した活気あふれる工芸部にするよう頑張っ行ってきたいと思って居ります。



受賞のよろこび



6月18日(土)全日空ホテルで行なわれた授賞式。喜びと緊張の受賞者と初入選者の皆さんの表情をピックアップしました。

絵画（全道美術協会賞）梅津美香（帯広）

多くの出会いと時間が与えてくれた協会賞であると、深く深く感謝しています。でも、まだまだたくさんすべきことがあります。めざす所もずっと先です。1つだけ決まっているのは、常に実感を伴って自分の日常を描き続けていくということ。それが大事なのだと今回の受賞で確信しました。毎日の生活も、スケッチも全てが一枚の作品の糧になります。受賞の喜びと感謝を忘れず、たくさんの人との出会いに刺激を受け、喜びを見だし描き続けていきたいと思います。

ありがとうございました。

絵画（北海道新聞社賞）蒲原静子（室蘭）

北海道新聞社賞という大変大きな賞を頂きまして身がひきしまるような思いでおります。

初入選の時とは別の感動があり新しい出発点に立ったようで、この賞は私にこのまま描いていっていいんだよ、と語りかけてくれているように思いました。これからもイメージを大切に自分らしい世界感を描いてまいりたいと思っております。

版画（北海道新聞社賞）坂みち代（札幌）

思いもかけず昨年に続き道新賞を頂きました事にとっても驚きました。と同時に大変恐縮しております。本当に有り難うございました。今年に入ってから母を亡くし特に精神的な面でいかに母を頼ってきたかという事を思い知らされました。今まで母に見守られ育ててきた自分、それが今回の作品のきっかけになった様に思います。おぼろげで曖昧な記憶と、自身の中に内在する何かが、無意識のうちに作品に現われてきたような気がします。

版画（佳作賞）浅川良美（江別）

搬入前日は、緊張 MAX で、この一年が思い浮かぶ。初入選の時「もう、言い訳はしない」と決め、「現時点で可能な限りの努力を尽くしたら後悔はしないだろう」と考えたが、毎年落ち込むのが常。だから、搬入当日は、無理して『自分を誉める日』に変えてあげる。でも、「今年は、昨年よりチョコシ大きい作品に挑戦してみたから…自分内では◎」などと、やっぱり言い訳している。

ここ数年は『一年の計は元旦ではなく全道展にあり』です。

版画（佳作賞）谷博（札幌）

北海道の自然の美しさの中で、一つは雪景色があると思う。作品『凍林』は自宅に近い屯田防風林の雪の朝を描いたものです。夜半、静かに降った雪は大小の枝々を包み、思わず『きれいだ』と声を発するほどでした。繊細ではかない美しさを表現するには木版画が適していると思いました。現実の美しさには及ばないが、少しは迫れたらどうか。木版画表現の特色、利点を生かし、見る人の心を一瞬でも引き止めることのできる作品を制作していきたい。

彫刻（佳作賞）森戸春樹（帯広）

毎朝起床するたびに「グー」の形に両手の指が強張り、三十分程掛けて一本一本ゆっくり伸ばしています。急ぎ過ぎると鋭い痛みがあります。「パー」の形に開くと握ったり持ったりは、それほど苦になりません。

久し振りに鐏のみや槌を手にして制作しましたが、思いの外、身体の衰えに気づかされました。一晚経てば元に戻った若い頃とは違うことを自覚し、「グー」に勝つ「パー」になるよう体調を保ち、作品づくりに努める所存です。

『今思うこと。』

工芸 (佳作賞) 新 関 千 裕 (小樽)

この度、第66回全道展に於きまして、佳作賞を頂き、会員の先生方、私を支えて下さる皆さまに心から感謝申し上げます。

私は、山形から北海道へ移り住み、硝子制作に携わり10年が過ぎました。この間に、全道展に知り合うことができ、出品を重ねてきました。今は、硝子という素材と自分に向き合い作品を作り上げていく時間が、かけがえない貴重なものとなっています。又、会の皆さまの作品に対する情熱に圧倒され、励まされています。これからも一步一步と進んでいけるよう努力していきたいと思えます。ありがとうございました。

「薫陶を授かり」

絵画 (佳作賞)・新会友 小 島 英 一 (岩内)

6年前、姉の勧めで初出品し部門は別だが二人とも初入選を果たした。今回は思いがけず新会友に推薦される幸運にも恵まれた。還暦を迎えた今年、改めて創作の原点を考えると、小学校時代の当時、大変な情熱で指導されていた坂口清一先生との出会い、また高校時代に教わった大地康雄先生との再会にあったと思う。薫陶という言葉を想い、奨励賞や今回、佳作賞を頂いた私の作品のタイトル「エスカレータ」で来年以降、下りのエスカレータに乗らないように、新たな気持ちで精進したい。

起承転…転

絵画 (佳作賞)・新会友 山 本 美 登 里 (札幌)

絵の描き始めは楽しい。泳ぐ魚のように自由な気持ち。けれどいつの間にか絵筆は各駅停車のように止まっている。拡がる闇。たたく私には自分の無能さにうなだれる。

出会いが別れの始まりとしたら、捨て去ることは新しい造形の第一歩かもしれない。そうだ、転じることだ。答えを見出したかに思えたが転んでいった。立ち上がりようともがくうちに搬入日。絵の具を絞り出した時にトラックが着き、私の絵は「結」を迎えた。

絵にも起承転結があるのだろうか。名画はどれも完結しているように思える。が、私の迷画は未熟さゆえ、描き足りないのか描きすぎているのかわからない。

受賞と会友推薦の喜びは重責でもある。絵を描く闘いが、厳しさを増していく。



『新会友になって』

工芸 (佳作賞)・新会友 今 野 明 美 (苫小牧)

家にハガキが届いた瞬間「うそでしょ」と驚きの声を発しました。陶芸を始めたきっかけは何か趣味でもと思い開窯した教室に体験に行き、できあがった“ぐい呑み”に感激を覚え、飽き性の私が17年間続ける事ができ、まさに晴天の霹靂です。全道展に出品する事を目標に創る喜び失敗した悔しさを繰り返し、第58回展に初出品初入選し、第64回展佳作賞を頂く事ができました。そしてこの度は抜き文花器“望郷”で二度目の佳作賞・新会友に選んで頂いた審査員の皆様に感謝の気持ちで一杯です。これからは新会友の名に恥ないよう一生懸命精進し、創作し続けていきたいと思えます。

『騒りの中で』

絵画 (奨励賞) 池 田 宣 弘 (札幌)

この度の作品が仕上がりに近づいた頃の3月、あの東日本大震災が起き更に追い打ちをかける様に原発事故(事件)が発生、今もなお多くの方々が恐怖に脅えております。人間程優れた生き物は存在しないはずが時として動物以下の誤りを犯し生命や自然を蝕んでいるのも私達人間でしょう。ここ数年それらをテーマに描いて来ましたがこの度の震災の報道を知らされるにつれ私の作品は何と軽々しいものかと恥ずかしくなりましたが、私に出来る事はただ思いを作品に込める事のみですので思い切って出品させて頂きました。この度奨励賞を賜り改めて感謝申し上げます。被災され亡くなられた多くの方々の御冥福をお祈りし、そして私の様なものでも絵筆を握り日々を送らせて頂いている事に感謝させて頂き合掌。

絵画 (奨励賞) 大久保 恵美子 (札幌)

この度、奨励賞を与えて下さいました諸先生方に感謝申し上げます。ありがとうございました。

全道展に初めて入選した時の感激は相当なものでした。南国に旅してヤシの木に魅せられ、海辺をゆったり楽しむ人々に魅せられ私もその中でのんびり昼寝をしたいというのが私の絵のモチーフとなりました。

誰からも束縛されず自由に自分の世界を表現出来る絵画、それを受け入れて下さる全道展って素晴らしいところですね。

ずっと続けて行きたいです。

絵画 (奨励賞) 岡 野 修 己 (釧路)

あれから30年、気が付けば、中高年の皆様方の仲間となっていました。

入選24回目の初受賞でした!!

さて、賞を貰ってしまった、またモンモンとした眠れぬ日々が……。

そして、私のテーマ「眠れぬ宙」との付き合いが、続きそうです。

「私と絵」

絵画（奨励賞） 小笠原 弘 子（札幌）

絵に於て師の教えを礎とし、その上に何を描いても自分が表われる。私にとって、どの様に描くかは、どの様に私があるかに関わっている。3月11日アトランティス伝説エジプト記に重なる大震災、暮れかぬる廢墟に鳴り響くコーラン苦しみ凌駕に皆、希望を托す。それでも日は昇り夜は月が出て花は咲き刹那に季節はめぐって行く。自分が生きた時代の一欠片、一つ一つに心を込めて「生きる」ということから得られる喜び悲しみ感謝、そして“生なるもの”に寄り添い、ときに解け合いながら描き続けていこうと思います。

此の度は審査を頂きありがとうございます。

絵画（奨励賞） 桔 梗 智恵美（滝川）

今回は奨励賞を頂き、今まで描き続けてきたことに対して、背中を押して頂けたように感じております。ありがとうございます。

就職、結婚、出産をへて、全道展に憧れて絵筆を持つようになり、今回が8回目の入選でした。振り返ると落選も含め11年、環境に恵まれて描き続けることができました。

毎年、絵をみて頂けたことに感謝をしながら、これからも自分の弱さとしっかり向き合っって描いていきたいと思っています。

第66回全道展にて奨励賞を受賞して

絵画（奨励賞） 清 水 昌 光（浦河）

絵を描くことが好きな仲間と手作りのベニヤ板に描いた作品をトラックで運んで出品した会場はデパートの催場でした。それ以来00年、家業の独立開業などで中休みもありましたが、全道展の先輩や先生から暖かい励ましや指導を戴きながら出品を続けました。

今回、思いがけず奨励賞を受賞して先生と仲間からの祝福を受けながら、皆様に少しは恩返しが出来たのかなと安堵致しました。これからも大好きな全道展の皆様のご指導を受けながら、鈍足ですが仲間と共に頑張りたいと思います。



谷ロー芳

絵画（奨励賞） 藤 田 博 子（札幌）

この度は賞を頂きありがとうございます。全道展に出品し続けて30数年になります。時間が許す限り出品したいと続けてきました。そして今、尚もひたすら描き続けていこうと思っています。続ける中で何かを発見出来るのが楽しみで、それが生きていく上で大切に思えてならないからです。日常の何げない日々の中で触発されるものは多々あります。その思いを形や色・構図でいかに表現すると魅力的になるのかなどと、もがいています。納得出来る作品が一点でも多く描けるよう精進しようと思います。

奨励賞を戴いて

絵画（奨励賞） 水 上 朋 子（旭川）

今回66回全道展に於きまして奨励賞を戴き、真に有難う御座居ました。

姑が子供が大きくなってからろうけつ染を札幌へ毎週二年間、習いに通った影響もあり私も三年間毎週札幌へ絵を習いに通いました。上手にならずどうしようかと思っておりましたところ、近くに遠山隆義先生のお教室があり通わせていただき、力の入った指導のおかげで、賞を戴く事ができました。今後共同教室のすばらしい仲間と共になお一層の努力を続けて行きたいと思っています。

奨励賞を受賞して

版画（奨励賞） 中 嶋 詩 子（札幌）

この度は思いもかけず賞を頂き光栄に感じております。これもひとえに適切なアドバイスをしてくださる先生や、先輩達のおかげと感謝の気持ちでいっぱいです。版木を削るサクサクという音。バレンの手触り。そして和紙に刷り取る時の緊張感。これからも長く続けてゆきたいと思い始めたこの時期での受賞。背中を押された思いがしました。私には過ぎた賞ですが大切にしたい嬉しい賞です。本当にありがとうございます。

彫刻（奨励賞） 小 原 俊 哉（釧路）

長年の夢であった全道展での受賞、昨年叶える事ができました。その重圧から、今年はどうしようと、かなりのプレッシャーの中での今回の出品でした。まさか、連続で賞を頂けるとは思いもよらず、また新たなプレッシャーに悩んでいます。「何を創るか、ではなく、何故創るのか、が大事なのです。」故斎藤一明先生の教えです。これからはテーマを見据え、気を引き締め、制作に励みたいと考えています。ありがとうございました。

このたび、奨励賞をいただき、ありがとうございます。今回の「首」は今春制作に着手しました。第1回目の作業中に粘土が落ちてしまい、粘土が柔らかく、支柱に取り付けた横木の位置が高すぎたと反省し、第2回目には荒づけをやり直しました。壁にぶち当たった時には、高い台の上から形を追求し、制作の間隔をあけてもみたり、またモデルさんに襟ぐりの大きな服を着てもらうなど色々な工夫をし、悪戦苦闘した2カ月間でした。微動だにせず座り続けてくれたモデルさんにも感謝しています。

奨励賞を受賞して

工芸 (奨励賞) 穴吹 良子 (小樽)

受賞式に出席できませんでしたが、今日、6月26日、賞状を手にして、感激いたしました。ありがとうございます。

生活の中にある色々な標識をみて、デザインしました。織の素材は羊毛糸、染は天然染料で制作しております。

これからも自分のペースで制作し、発表して行きたいと思っております。

—奨励賞を受賞して—

工芸 (奨励賞) 阿部 榮 (札幌)

私は、ステンレス・アルミ・鉄などの金属で物を作る仕事をしています。2008年に彫刻家の國松明日香先生にお会いする機会があり、アートに対する私の意識などすべて目覚めさせて頂きました。2009年、初出品は、すべて落選でしたが昨年65周年記念で奨励賞を受賞し本当に嬉しさと驚きと共に今後の制作意欲の励みとなりました。そして本年、2作品が入選しひとつが再び奨励賞を受賞しました。本当にありがとうございます。これから先の私の人生の目標として毎年出品してゆきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願い致します。

工芸 (奨励賞) 佐藤 さがみ (小樽)

この度は初出品にもかかわらず、受賞出来ました事、心より感謝致します。ありがとうございます。

昨年9月末、30年振りに富山より小樽に帰郷して参りました。富山で陶芸と出会い、それから20年程続けております。小樽でふと目にしました全道展のポスター、何も分からぬまま応募致しました。受賞と入選に驚きました。受賞式楽しみにしておりましたが、急な事情で欠席してしまい残念でした。次回は是非出席できます様、又頑張りたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

奨励賞ありがとうございます。二年連続焼成中に作品が割れてしまい、出品できませんでした。思いがけなくも賞をいただき、今回で二度目の奨励賞です。何度もイラストを書きなおして制作した作品です。これからも全道展に恥じない作品を、出品して行きたいと思っております。ありがとうございます。

絵画・新会友 大築 笙子 (室蘭)

この度は会友に推薦していただきありがとうございます。昨年に続き全道展の晴れ舞台に立たせていただき身に余る思いでございます。顧みますと、初入選の時第2室に自分の絵を見つけ大変興奮したことを思い出します。その後18回入選させていただき、ようやく全道展の一員になれたような気がしております。今後は自分の絵、自分しか描けないような絵を追求していきたいと考えております。個性のある全道展。その個性が益々輝いていきますように祈っております。

絵画・新会友 豊嶋 章子 (札幌)

全道展に出品すること自体が夢のように思えた23年前。手の届かないものと思っていた会友にこのたび推薦され、長く続けているといつか夢が現実になるもの、と喜びをかみしめております。

西日が入る午後の室内は影絵の世界。刻々と微妙に変化する様子に、当たり前と思っていた光と影がとても新鮮に感じられキャンバスに向かってみました。

これからも楽しみながら続けていこうと思っております。ありがとうございます。

版画・新会友 石塚 善朗 (札幌)

会友推薦ありがとうございます御座居ました。今年の版画の題名は「嵐の後」でした。昨年秋に大荒れの日を選んで塩谷の海岸へ行き、大波の打ち寄せる荒涼とした景色を満喫。もちろん浜には私一人。帰りがけに岸辺に一羽の鷗のむくろを発見。くちばしを空に向け無念の表情。これが版画の動機になりました。寂しいのでロープと浮き玉も加えて完成。でもこの後にあの震災。壊れた堤防、大波、絡みあったロープと浮き玉、失われた命、と報道される被災地の情景とのあまりの一致に悄然。三陸地方の皆様の気に障る版画でごめんなさい。



この度は全道展総会において、新会友に推薦していただき誠にありがとうございます。振り返れば、2001年に初出品して以来、今回で10回目の挑戦でした。私にとってのこの10年は、長くもあり、短くもあるような年月でした。制作を始めた頃は、ここまで続けている事を想像していませんでしたが、今こうして継続できているのは、これまで関わってくださった、先生方、諸先輩、友人、家族のおかげであります。今回の新会友を励みに、今まで以上に良い作品を制作していきたいと思っております。

すずめ啼け啼け

絵画・新会員 木滑 邦夫 (千歳)

もう日が暮れかかろうとする頃、会員推挙の報をいただき、感激してお受けしました。

全道展の自由なキラ星に憧れ、全道展搬入間近の頃^かだけ、造形のヒミツが解けそうな気がして…^か斯く^か斯く^か然然…の繰返でした。

力不足を自覚し、今まで以上に、雀の千声で絵を描いて行きたいものと考えています。どうぞよろしくお願ひします。

全道展に出品しつづけて50年

絵画・新会員 隅田 重明 (函館)

絵は描いても描いてもこれでいいということはなく、常に挑戦でした。私の絵は、自然との対話から生まれたものを「風」という自分のテーマに意味付けていく表現方法をとっていますが、この数年、やっと自分の生き方そのものと感性がうまく繋がり、作品に光が見え始めてきたところでした。そんな中、「会員推挙」うれしさがこみ上げてきました。全道展の毅然とした揺るぎのない芸術精神を受け止め、更に、作品を充実させていきたいと思ひます。ありがとうございました。

絵画・新会員 成澤 正子 (旭川)

この度の66回展で会員になりました。初出品から20年、一度も休む事なく続けられた事を嬉しく思っています。その間多くの人から厳しい御意見や暖かい励ましをいただき勇気づけられました。

3月、作品制作中に大震災が起り、どこもかしこも瓦礫の山の映像を見るにつけ、私は作品に現状を嘆くのではなく希望を描こうと思ひました。その気持ちが観る人に通じたかどうか……。

生きづらい今の社会情勢で、心に喜びの明りを点してくれるような、そんな作品を描いてみたいと夢見ています。

この度は誠にありがとうございました。自分にとって創作は世の中との対峙で、思いを留め整理し像に残す事だと思っています。

頭の中で描き始め出来上がったら一気にキャンバスに写します。そこからは楽しい日々です。毎日空いた時間で加えたり消したりの作業です。次の作品に取り掛かる時はより進化しようと思っています。自分をつぶして描き始めます。ダーウィンさんにお聞きすると、唯一生き残れる方法は、変化できること。と教えてくれました。

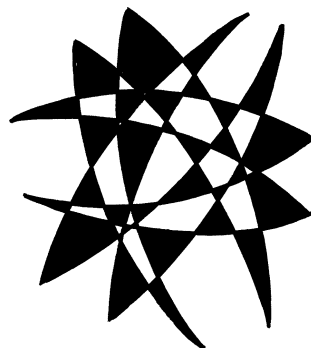
版画・新会員 伊勢 陽子 (札幌)

私はたゞのオサバンである。何の変哲もない一介の主婦である。日々家事をこなし、家計をやりくりし、子供を育て、人生の大半が過ぎてしまった。ふと気がつきこのまゝ、老いさらばえてははいられない。木版の版をけずる仕事はとても楽しく私にあっていたらしい。

深く考えもせず、すゝめられるまゝに公募展に出品しいくつかの賞を頂きうれしかった。でも今「会員」という事になり、自分の力のなさにうろたえている。人生後半のロスタイムに天からの大きなプレゼントでよかったねと夫は云ってくれた。お世話になった方々に感謝している。でも私は悩んでいる。

版画 (会友賞) 村井 峽戸 (札幌)

この度、思ってもみなかった会友賞を頂き心からお礼を申し上げます。過分に評価して頂いたと思っております。銅板は腐蝕法の尽きない面白さと版を磨いては光らせるということと相まって、限りのない魅力を持った表現手段だと感じています。制作過程や仕上げた作品からは、自分の見直しとする事柄や性質が反映とされ、それをどんなふうに捉えるのかということの難しさと同時に、立ち向かってゆく面白さを感じながら今に至っています。銅という金属の質感が好きで自分に合っているものと信じ、励んで行きたいと思っております。ありがとうございました。



片岸法恵

初入選

家族と共に

絵画（初入選） 柏崎 龍 男（根室）

全道展より吉報が届き、いつもの事ながら、家族全員で計りしれない喜びに浸って居る所です。

テーマに拘り、表現しきれないところですが、今後も真摯な気持ちで、自分の思いを少しでも出して行ければ、と思っています。これからも、どうぞよろしく御願ひ申し上げます。

又長時間にわたり、審査して下さいました、大勢の先生方に心より感謝申し上げます。

絵画（初入選） 中 台 一 子（苫小牧）

入選したとの連絡を頂いた時、地元から出た事のない自分の作品が初入選でした。札幌市民ギャラリーと云う大きな会場に展示される事の驚き又、うれしさ。私にしますと絵舞台でございました。長年描き続けて来て批評も頂きました。これからの大きな支えになり、うれしゅうございました。今後、サークル活動での小笠原実好先生の指導をうけ、描き続けて行きたいと思っています。

ありがとうございました。



全道展ホームページ <http://www.zendouten.jp/>

特集

これからの全道展のあり方を考える

全道展は札幌及び近郊在住作家以外に、東京をはじめ北海道6地域に在住する作家たちが、各々の地区で展覧会を開催する等、地道な活動を続けている。広く人材の育成や運営の厳しさに直面し、様々な問題を抱えながらも、行動で応えようとの姿が見てとれる。今回はそんな各地区長の声を取りあげた。

■これからの全道展を考える

東京支部長 水落 啓 (版画)

東京支部では毎年気候のいい5月頃に懇親会を兼ねた会議を開いております。会員は絵画(大谷久子・岸葉子・小川洋子・紺野修司・福井路可)彫刻(北村善平・黒田栄一・橋本論)版画(水落啓)の9名

会友は絵画(鳴海昭・平松佳和・志田翼)、彫刻(谷内建)の4名(2011年4月現在)

その他、東京近郊在住の一般出品者にも声をかけて例年ですと十数名が集います。しかし今年のご存知の様に大きな震災がありまして状況が不安定ですので、様子を見て秋まで延期する事にいたしました。ご高齢の会員が多いので震災後はちょっと心配しましたが今のところこちらの皆さんは息災であられるようです。

さて、昨年からわたくし支部長を務めておりますが、今から15年前の1996年～1998年までの3年間も支部長を仰せつかっておりました。当時は創立会員小川マリさんを筆頭に会員20名、そうそうたる作家の集まりでした。懇親会に於いても道新東京支社の記者を招いて、毎回北海道弁まじりの熱い会話で盛り上がりました。「浪漫の香り高い芸術家の集まり」新参の私はそう感じたものです。

しかしながら現在の支部の状況は、退会される会員が年ごとに多くなり、またご高齢の会員は会合になかなか出席できない等々で、以前ほどの熱い雰囲気は影を潜め往時を知る私には少々淋しい想いです。

本郷新さん達から始まった東京支部の栄光・伝統はここへきて、大きな曲がり角にきた様です。東京支部のひとつの時代が終わったのではないかとも感じています。ただ若手の会友(平松君・志田君)やこちらからの一般出品者も増えつつある事も事実で、他の道内公募展にはない東京支部という存在を、この先どのような形に持って行くか「これからの全道展」と共に「これからの東京支部」を考えるという問題が差し当たって急がれる課題です。

北海道との関わり方のひとつとして、こちらでいつも話題に上る支部展の札幌開催の問題あるいは若い作家の後押し、審査への毎年参加等々秋の会合では皆さんの要望・意見を聞きつつ、支部としての今後のあり方を考えたいと思います。

2011年6月

■全道展函館地区の活動

函館地区長 安井 孝

函館地区展の事務局を務めて3年目になります。移動展が終了し、新たに函館地区展となって本年度で第13回展を迎えます。

この数年は会員・会友・一般出品者合わせて約60名が所属し、毎年50名前後の出品が続いています。

かつて、市内デパートなどの会場確保で苦しんだ時代がありました。道立函館美術館に隣接して函館市芸術ホールギャラリーが開設されてからは催しが集中する時期さえ避ければ会場確保に苦労することもなくなりました。

現在、出品者一人5,000円の分担金と入場料500円、毎年減り続ける広告料、全道展会計部からの地区活動費で運営していますが、11回展、12回展に有料入場者が頭打ちで厳しい財政事情に苦しんでいます。又、2年連続で本地区展をリードされてきた会員を相次いで失いこれも大きな痛手でした。

出品者と入場者を増やすこと、会計面での抜本的な改善が今後の会務運営の課題です。

全道展第13回函館地区展は2012年(平成24年)1月5日(木)～11日(日)、函館市芸術ホールギャラリーで開催されます。

■若い作家よ、出品してほしい

室蘭地区長 矢元 政 行

私が、全道展に初出品した当時(30周年記念展頃)は、私も含めて20代、30代の若い作家がたくさんいた。私も57歳となり、気付くと30年以上も全道展に作品を出している。

6年前に室蘭地区長を工藤善蔵会員から「若いから」と言われ、半ばしかたなくお引き受けし、今、何とか地区を取りまとめている。もう交代したいのだが、次にやってくれそうな方がなかなかいない。お願いしても断られ続けている。室蘭地区は、室蘭だけでなく近隣の登別・伊達・洞爺湖町……といった地域の会員、会友、一般出品者の35名ほどで構成されている。年に1度、札幌での全道展終了後に総会と交流懇親会を持ち、新会員や会友、受賞等のお祝い、作品について語り合っている。室蘭地区も作家の高齢化が進み、病気や体調不良などでやむを得ず出品出来ない作家もいる。

これからの全道展を引っ張ってくれる行動力と有能な若い20代、30代の作家を発掘する必要がある。40代の作家でもよい。若手を発掘、育成することが、我々の急務である。

いつも審査で思う。若い作家であれば、技術的にも、表現が未熟でも、作品上の課題があっても、荒削りでも、完成度が低くても、一点光るものがあれば、評価してやることだと。若者には、可能性があり、伸びる。これが自分の役割だと思っている。若い作家にとって公募展が、自分を売り出す場、発表の場として有効な機会ととらえ、出品してくれることを切に望むしかない。

思案ばかりしていても始まらない。何か、行動を起こす時である。

■さて、全道展

帯広地区長 森 弘 志

その土地に生きる人々が、愛情をもって丁寧に他者の営みに目を向ける社会環境の中で、歴史や文化が醸成されるものと日ごろ考えている。今夏、道立帯広美術館では、その考え方に叶う「十勝の美術クロニクル」という資料性と発見の多い、地味ながらも優れた展覧会が開催されていた。

さて全道展。目を向けて益体^{やくたい}のある表現者が少なからず居た。どこかがんじがらめの都美館よりも伸びやかな人の姿、作品の姿が熱を帯びてそこにはあった。公募美術団体を必要としなかったはずの自分^{よかい}ながら、自問の場として関わってみようと思ったのは齢青二才の頃の事。それからは、公募美術団体に横たわる慣習^{よかい}慣例を無視して自由であり続けた。

かつて「美術団体への所属は、あなたにとってはマイナスに繋がりがやしないか」との指摘を受けた事がある。「いや、理想を語り、理想を求め、厳しく試される場であるには変わらない」とその時は応えた。

厳しさには理由が、試される場には魅力が、優れた問答と結果には人を惹きつける何かがあるものと考えている。運営に関する具体的な提言は別の機会にするとして、全道展の現在にそれらは在るかの検証を手筈に、熟思して行きたいものである。

神田日勝が中心軸にいた時代から受け継がれた、十勝地区会の穏やかな気風は、同時に唯一無二を尊重し、今年度の協会賞（帯広の梅津美香）をはじめとした多くの受賞者の輩出をもって結実している。まずは私達が住む十勝に於いて、伸びやかに理想を求める人々の集まりでありたいと願っている。もちろん厳しさをも楽しめる。

■全道展・全道の人と

釧路地区長 柳 悟

かつて、札幌市民ギャラリー前には駐車場があった。深夜の1時に釧路町字遠野原野の我が家を車で出発。午前9時には札幌市内に入り、10時前にはこの駐車場に到着。下車して「アッ」。同時に隣の車から降り立った男性

も「アッ」。彼も地方在住の会員である。昨日出発して、今がお目覚めということである。私達は互いの行動に納得をした。やはりこの行動が最善なのだ。

鉄道の利用なら、私の場合は最短の駅まで車で12km。駅前に駐車してローカル線の朝1番で釧路駅へ。ようやく釧路駅で乗り継ぎ「おおぞら」で札幌駅へということだ。しかし札幌が近づく頃には、すでに全道展の総会には遅刻なのだ。前泊が必要なのである。地方とは不便なものである。地方の出品者やファンの方々も、それぞれの立場で大変な苦勞をしているのである。

釧路地区では、地区の会員・会友・出品者で地区展を開催しているが、やはりこれでは満足できないのである。66回展では、釧路から入選10名（受賞3名）、根室から5名という結果であったが、地方からの出品者増やファン増についてはなかなか困難というものである。

かなり以前には、斜里町・中標津町・根室市・釧路市での巡回展に協力をしたものだが、各地とも関係者や地域の方々からは極めて高い関心や熱意が感じられたものである。やはり北海道は広いのである。地方の地方では鉄道では不便、自家用車では遠すぎるのである。

全道展を全道民の文化活動として、発展・充実について一層の活性化をめざして検討を重ねたいものである。

■全道展はいま……

旭川地区長 高 橋 三加子

旭川と近辺の出品者の数は、現在四十名をはるかに超えた。本展に合せて、この時期小品展を毎年開いている。出品者の交流が目的だが、一般出品の方達や作品など、失礼ながら、ほとんどわかっていない。旭川の事務局でありながら、怠慢この上ない。巡回展がなくなり、個人情報制限されて、人間関係がなんとなく希薄になってきたような気もする。しかし全道展の魅力は何か、ということになると、俄然組織論など意味はなくなる。会員ではあるが、個々の作家としての作品。内容と質に掛ってくる。出品者や入場者の減少など、そもそも人口が減ってゆく中での組織であり、おそれるに足らないと思っている。

全道展は昔から会員の作品の魅力で成り立ってきた。優秀な作家達がいて、刺激を受け、自分の絵画感や哲学を制作の中で必死に追求をし、答のでないキャンバスと格闘する。自分の過去をふり返ると、この経緯をたどってきた。出品者が一点の作品に心ひかれ、共感を覚える時、制作する勇気が湧いてくる。もしもそのような作品と、どこにも出会えなかった時、全道展の危機が始まるのかも知れない。

近況

“来年こそ”——八木伸子

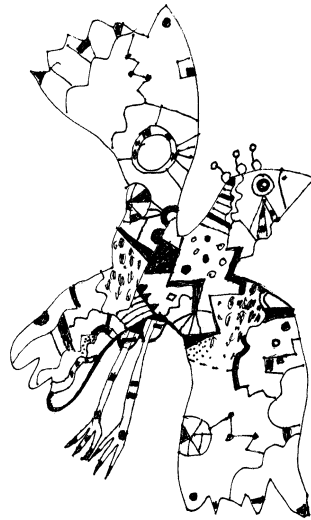
今年二月はじめ、春陽展に絵を送る季節、私は突然不出品をきめた。二十三才からたった一回休んだだけで、出品を続けて来た。たゞ毎年会場に並んだ自分の絵が未熟で、なんとか来年こそはと、描きつづけて八十六才になってしまった。二、三年前から歩行困難がひどくなり、胃が押されるので毎日描く絵に力が入らず、集中出来ない。八木が又体調がハッキリせず、昔から薬と病院を拒否して来たのをやっと二人でお医者様に診て頂いたら、「即入院」。このまゝでは二人共、共倒れになると言われてしまった。でも八木は、「残る時間は自由に、誰にも命令されたくない。」と雪の山の家に戻ってしまった。私も右ならえ。子供もいないし、老いて二人の生活はきびしいのは覚悟の上、今は絵の具を片づけて、全道展もお休みときめた。まず体力の回復に専心しよう。

そして来年こそ、「やった。」と思える絵が出来ることを夢見て。大地震は自然のおそろしさを強く教えてくれたけれど、困った時、辛い時、窓から見おろす宮の森

の風景は、息をのむ様に美しい自然でもある。

そんなわけで、いろいろ失礼も多いと思うがよろしく
お願い致します。

4月22日



Takayan

玉村拓也

アトリエ訪問 小笠原実好会員

6月27日、第66回全道展閉会の翌日にかねてからの約束どおり小笠原実好会員のアトリエを見学するため、苫小牧へ向かった。

晴れてはいたが、もうすぐ7月になろうとしているのに、少々肌寒さも感じる。

国道36号線の海沿いにあるホームセンターで待ち合わせをし、氏の車に同乗し、アトリエまで案内してもらう。樽前山の方角に車で5分くらい走ったところに氏の第2アトリエがあった。

周りは、自家菜園畑が広がったのどかな場所にあり、広さ24畳のアトリエは、全て小笠原会員の手作りだというのだから驚きだ。アトリエ全体が彩色され、かわいい鳥の絵も大きく描かれている。

敷地は柵で囲まれている、以前は柵などしていなかったのだが、心無い人たちが敷地内にある畑とかを荒らしていくので、仕方が無く張っているのだそうだ。

アトリエの入り口には、木で作ったオブジェがまるでアトリエを守るかのように鎮座している。

今は行動展に出品するため、早朝4時から此処第2アトリエに来て昼迄ここで制作をしているとの事。氏の制作方法は、まずはキャンバスに粘土を施す事から始まるらしい。制作のどの過程で使用するのか、グラインダーも使うとの事で、彫刻家も顔負けの作業である。一見荒々しく見える絵も、間近で見ると実に繊細に計算されている事が伺える。大きなキャンバスを2枚並べ、一つの大作に仕上げていくのだそうだ。このような大作を4点も出品するというのだから、相当な体力と精神力を必要とするだろう事が想像できる。

次に静かな住宅街の自宅横にある、広さ15畳の第1アトリエを見せてもらう。午後からは此処で制作するとの事。

氏は、幼い頃から絵が好きで、よく小学校などに一芸に秀でている子供がいるように、氏もまた絵の才能に特化していた。小学校5年生の時に絵のコンクールで受賞、札幌の丸井デパートに飾られたりもしている。しかし18

歳のとき、世を騒がした大久保清事件が起こり、氏の中に「絵描き=悪い人間」のイメージが付いてしまい、しばし絵から離れることになる。

氏の躯体を見ても想像できるが、幼いときから柔道を習い、高校の時には空手部に在籍、30歳まで現役の空手家でもあり、20歳からはじめた登山は、今でも週に2回は山に登っているという。今年も7月7日から10日まで日高山脈に登る予定だそうだ。

苫小牧に居住を移してから、鈴木善公氏の元で本格的に絵を描き始め、(当初の)廃船を題材とした具象画から抽象画に移行した現在でも廃船、または夕張の枕木などをモチーフにしたイメージで描いているという。

“落ちぶれたものが好きだ”と語る氏は、一度終わったもの(廃品など)を画材として絵に取り入れる。津波で出た瓦礫などが作品として蘇る。麻袋を貼り付け、粘土を塗り時に石膏を塗り重ね、絵の具を塗る。塗っては削り、また塗っては削る。絵を壊しながら仕上げる。“中心も無ければ、拡散も無い。”と氏は言う。「復活」と題された作品。氏の強い思いを感じながら、苫小牧を後にした。

(2011.6.27 伊藤隆弘 記)



随想

—私の制作の原点—

『自己表現』

工芸 馬場 雅己

小樽でガラス工房を経営しています。

多種多様なニーズに応えられる様、日々技術を磨くことを心がけ製作に励んでいます。しかし、これを生業としている以上制限が付いてくる。それは、生産原価。当たり前のことですが、短時間で沢山のものを作れば原価も下がり、利益が上がる。『あとひと手間、あとひと手間加えたい』と思う気持ちと、『効率』との葛藤が常に付きまとってきます。

これらのものから解放されはじめて真に自由な創作に入ることができる。しかしその環境を作ることも容易ではない。独立して8年やっとその環境ができてきたように思える。それと同時に、自分の精神的な環境も整ってきたようにも思える。これは、全道展で養われた結果だと思う。

まだまだ、スタートラインに立ったばかり。創作できる環境があることに感謝し、己の内面的な部分をどう表現できるのか日々探求していこうと思う。『自己表現』とは……



私の制作の原点

彫刻 野村 裕之

私の原点はエンクさんです。諸説ありますが円空は江戸時代に私の故郷岐阜県で生まれました。つまり同郷の大先輩と云う訳です。円空の大胆な造形性大好きです。今でも日本史上最大の彫刻家だと思っています。作品はレプリカを含め沢山のお寺、資料館博物館で見ることができる他、円空彫りと呼ばれる木彫が盛んで、私も中学



生の頃から鉦割したオンコ（岐阜ではイチイ「一位」と言います）などを彫っていました。

彫塑にはモデリング modeling（塑像）とカービング Carving（彫刻）がありますが、始めが円空彫りだったせいか今でもカービングでしか作品を作ることができません。絵画で言えば油絵と版画の違いに近いでしょうか。

円空は作品を残しながら北海道にも渡っています。彫刻と旅を両立させているところがまた憧れる。私も北海道に来たばかりの時、全道展を観て未だにこんな事やっているところがあるんだと思ったものですが、今ではどっぷり浸かってしまって何も感じなくなっていました。そろそろ動かないといけない時かも知れません。

制作のはじまり

版画 吉田 敏子

アトリエの窓辺に、旅や散歩の途中で拾い集めた雑多な枯葉、流木、石、砂等と共に作品の入っていない安物の小さな額縁がある。色々、作品を入れて試してみるのだけれど、どうしてもしっくりいかず、拒絶するような感じがそのままだにそこに飾ってある。それを横目で見ながら、制作の始まりというのは、そのような何もない空間を深く見つめるところから始まるのではないかと思う。



人間は誰でも心の底に
しんと静かな湖を持つべきなのだ

容易に増えも減りもしない自分の湖
さらさらと他人の降りてはゆけない
魔の湖

人間の魅力とは
たぶんその湖のあたりから
発する霧だ

今、制作のはじまりに少しでも、そのような霧を発せられる作品に近づきたいと思う。そして、版画という工程に制約のある中からも、出来るだけ自分の発想や感覚に正直に自由でありたいと思う。

心の形・色を探して

絵画 會田 千夏

小さい頃からお絵かきが好きで、漫画家になるのが夢でした。好きなキャラクターをそっくり上手に描けると嬉しくて、時間があればイラストばかり描いている子供でした。中学、高校と、徐々に描く対称は変わっていきましたが、上手く描けるようになることが目標で制作をしていたように思います。難しい勉強が苦手だった私にとってイラストや絵は、他人に褒めて貰える数少ない特技の1つでした。大谷短大の専攻科に進んでからは、絵を描いて「表現する」ということについて考えるようになりました。好きな絵描きさんや、その絵に憧れたとしても、私はその人にはなれないし同じ絵を求めてもそれは自分ではない。それに、絵の上手な人は沢山いる。どうしたら、これは「私の絵です」と言える作品作りができるのか…を考え続けて今の描き方に辿り着きました。今は、子供の頃から今まで変わらない自分の物事の感じ方や考え方をヒントに、気持ちの形や色を感じ取ることを目標に制作をしています。最後に…子供の頃から私の絵を沢山褒めてくださった学校の先生や家族、友達に心から感謝をしています。



お便りコーナー

全道展を知って初出品

(絵画) 富樫 良男 (紋別)

年令を重ねるにつれ、一日の過し方の大切さを少し感じる様になってきた気がする。

全道展を知り、初出品はオホーツク紋別に廃船ばかりを描いていた水彩画家の須藤秀雄(長らく全道展、日本水彩連盟展に発表)さんから全道展出品を勧められたのがきっかけです。

須藤さんは昨年市民美術展に作品を展示され、会期中の訃報で77才で急逝されました。残念でなりません。

私の小さな絵心を大きく揺さぶってくれ本当に前向きなアドバイスをいただきました。

全道展60年記念展へ初出品、以降入選落選を経ながら今日に至っています。

初出品の絵は農夫とストーブを描き講評で日勝とイメージが重なると評され「あの有名な馬の日勝の絵」とびっくりもし大変嬉しく思ったものです。というのも私は農家生れで子供の頃、馬とイモ畑を見て育ったせいか日勝作品が好きで画集を買ったり、神田日勝記念館へ足を運んだりしました。

60年、65年の全道展記念展も「農」がテーマでした。

大地を踏みしめ働く農夫を力強く描けたらと思う。

現在、齢(よわい)63才、肉体は力強さも逞しさも減退方向の私ですが自前の家庭菜園を楽しみながら土に触れ、土と人を題材に絵筆を持ち続けたい。

23.4.16 記

全道展メモリー



(絵画) 宮地明人



(工芸) 三好美和子

● 編集後記 ●

東日本大震災とその後の原発事故一。

周辺に暮らす人達の、筆舌に尽くしがたい苦悩を思う。

一方、平穏な地に住み創作活動に携わることができる私達、改めてその幸せを思う。Zen 46号に寄稿くださった皆様へ感謝したい。

庶務部編集担当 中田・三上・米澤 (文責)

第1回
全道展新鋭展

10月27日(木)～11月1日(火)

大同ギャラリー

10月27日(木) 18:00～

オープニングパーティー

※多くの会員会友の方のご出席をお願いします

第53回

学生美術全道展

2011年10月8日(土)～11日(火)

※10月10日(月)は休館

札幌市民ギャラリー

搬入 10月4日(火)

審査 10月5日(水)

陳列 10月7日(金)

授賞式・作品批評会 10月9日(日) 13時より

※搬入・審査・陳列・作品批評会に
多くのご出席をお願いします。

ウッドワン美術館名品選

巨匠たちの饗宴

— 日本近代絵画 —

7月16日(土)～9月9日(金)

休館日:月曜日(ただし7月18日は開館)、7月19日(火)

午前9時30分～午後5時(入場は午後4時30分まで)

北海道立旭川美術館

Hokkaido Asahikawa Museum of Art

〒070-0044 旭川市常磐公園内 TEL(0166)25-2577 FAX(0166)25-2539

主催:北海道立旭川美術館、北海道新聞社
ウッドワン美術館

巨匠たちの饗宴旭川展実行委員会

後援:旭川市・旭川市教育委員会

9月16日(金)～11月7日(月)

休館日:9月20、26日、10月3、11、17、24、31日

午前9時30分～午後5時(入場は午後4時30分まで)

北海道立帯広美術館

Hokkaido Obihiro Museum of Art

〒080-0046 帯広市緑ヶ丘2番地緑ヶ丘公園 TEL(0155)22-6963 FAX(0155)22-4233

主催:北海道立帯広美術館、北海道新聞社
帯広市・帯広市教育委員会

ウッドワン美術館

巨匠たちの饗宴帯広展実行委員会